郡市医師会だより

今号は、釧路市医師会報第120号（平成19年10月20日付）「釧路市医師会・釧路国医師会一体化記年号」から、執筆者ご了解のもと転載いたします。

－広報委員会－

釧路市医師会・釧路国医師会一体化に際して

釧路市医師会会長　西池　彰

平成19年5月12日（土）釧路全日空ホテルにおいて釧路医師会・釧路国医師会一体化記念レセプションが執り行われた。

当日は来賓として、北海道医師会から畑俊一副会長、地元からは伊東良孝市長を始め、7町村長および各関係機関の皆様と会員52名、計65名が参加して盛大に開催された。

さて、この度の一体化については、約3年前から麻生釧路国医師会長を通して話があった。その理由としては、釧路国医師会会員が非常に広範囲に分散されているために、総会・理事会・その他、会員の総意を協議することが大変困難であり、同時に医師会としての事業活動を行うことも無理であるとのことであった。特に1昨年10月の阿寒町および音別町との市町村合併がなされて、釧路国医師会に所属するこの2町の医師が釧路市医師会員となったことから、にわかに表面化してきた。

市町村合併による医師会の統合は、道内でも、函館、室蘭、苫小牧、岩見沢、美唄、滝川各医師会において例が見られる。

このことを受け麻生会長より、釧路国における重症患者および救急医療にとっては、釧路市医師会との緊密な連携および迅速な移送が必須であり、これを機会に他の7町村も釧路市医師会に加入させて欲しいという強い要望がなされた。麻生会長から、釧路国医師会は平成19年4月の一体化に伴い3月末をもって解散することから、当医師会に次のごとき要望があった。

1. 平成18年度、釧路国医師会予算（余剰金見込額）から、釧路市医師会に対して500万円を支出したい。
2. 釧路市医師会においては、これを財源として平成19年度において、
   ①医師会報の一体化特別記念号を発行していただきたい。
   ②19年4月に、釧路市医師会に新規入会することとなるので、交流・懇談の機会の費用に当てていただきたい。
   ③残余が生じた場合には、一般の運営費に充てていただきたい。

というものであった。

当医師会としては、平成18年3月総会にて「一体化協議について承認を求める件」を議決。9月臨時総会にて「一体化について承認を求める件」を可決。19年3月の定時総会において、定款の改正および一体化後の19年度、事業計画、予算等の承認を得、4月1日より施行されることになったわけである。

それにより、釧路町、厚岸町、浜中町、標茶町、弟子屈町、鶴居村、白糠町の7町村から22医療機関31名が新入会員として加入、この結果、釧路市医師会は、106医療機関263名となったわけである。

釧路市医師会会員の増員は誠に喜ばしいことではあるが、この度の一体化は道東の医学史と共に昭和23年に発足した新生釧路市医師会の歴史にとっても極めて重大な事柄だといえる。

釧路地方医学史によると、釧路の医師第1号は明治3年の藤野玄洋であるとされており、明治8年には現在の市立釧路総合病院の前身である、官立釧路病院に紀州藩医の有馬元丞が官立厚岸院長から赴任したとされている。漁港としては、釧路よりも厚岸の方が歴史があるわけで、当然、医学の歴史も厚岸の方が古いと考えられる。

大正5年の医師会名簿をみると、釧路の医師は釧路外5郡医師会所属になっており、会長という職名はなかった。

医療制度とその地域の社会情勢により、明

治以来の道東の医学史もまた、次第に変遷して来たわけで、それらの史実をできるだけ正確に記録に残さなければならないと思う。

この度の記念号を機会に少しずつでも実現できればと期待する。

私事ではあるが、平成10年に発刊した釧路市医師会50周年記念誌の中で、釧路市医師会発足後50年間にわたる時間外・休日診療の救急医療の経緯と題して私が執筆を担当した。その際、残された資料ではなく口答で直接お話しを聞かせていただきたく、故中沢悟郎先生を伺い、戦後の釧路市の状況を生々しく教えていただき、大変参考になったことがあった。先輩の先生がお元気な内にできるだけお聞きすることが重要であると認識したものである。

行政面の市町村合併は、それぞれの地域の温度差によりなかなか困難であるが、医療の分野では地域住民が全て均一に温かな医療に浴する機会が与えられなければならない。その意味では今回の一体化は非常に意義深いことだと考える。これからの目標として、

1）釧路管内（8市町村）における医療連携の強化
2）医師会組織体制の充実、強化
3）産業保健、住民検診、学校保健を含めた地域医療の向上・発展

のために手を携えて、更なる発展のために努力したいと意を強くしている所であります。

特に現在、当医師会の抱えている最も大きな問題である「救急医療体制の再構築」と「釧路看護専門学校の開校」に対しては、特に新会員の皆様方の協力、更に8市町村からの温かい御助力をお願いする次第であります。

（西池整形外科クリニック　理事長）

清　　算

釧路国医師会
前　会　長　麻　生　國　雄

医師会を解散するなら清算人を置けという。財産も借金もない法人なのに…と思ったが、言われてみればなにがしかの残務はあろうかと引き受けることになった。さて、清算となると想いは勝手に昔へと遡ってゆく。新生釧路国医師会は昭和二十二年に発足し、活動開始は翌年であったという。

昭和二十三年東京・・・。三年余りの疎開から帰ると、家は国に接収されており労働省の高官が住んでいた。しかし、あたりの街は静かだった。敗戦のどさくさが一段落したのか、ロシア大使館に程近く爆撃を免れた地域だったせいか、あるいは進駐軍にこれから本格的に清算させられるのを恐れて、大人たちが息を潜めていたためだったのか。一方、盛り場は違った。賑やかだった。せわしなく動き回る人々が皆それぞれに敗戦のつけを今支払っているとは知らず子供心を弾ませていたが、弱いものが無惨な清算を強いられる現場に出くわすことになる。六十年の歳月を越えて今なお鮮やかに蘇る二コマの光景がある。上野駅白昼の浮浪児狩り。追う者も追われる者も形相は凄まじく、到底人が人を追う姿ではなく、まさに狩りだった。同年代が逃げ惑いそして首尾よく逃げ延びる迄を小刻みに身体を震わせながら見つめ続けた。井ノ頭線渋谷駅、階段下の路上で当時第一高等学校生が南京豆売りをしていた。台に山と積んだ南京豆を一合枡で量り小袋に詰めて道行く人に売るのである。その一高生が左手に持った詰めたばかりの小袋を力一杯握り潰すのを見た。彼の視線の先には若い娘の姿があった。三人の進駐軍兵士に担がれ恐怖に声にならない悲鳴をあげ、手足をばたつかせながらジープで連れ去られる姿が・・・。ジープの廻りを十数人の男が取り囲んでいたが、手出しはおろか声を出す者すらなかった。皆拳を握り締めて耐えるほかなかった。

昭和四十九年北海道厚岸・・・。「四月はまだ寒いから六月がいいですよ」の助言に従って、五月末に神奈川から移り住んだ。この地に青山ありと踏んでのことであったが、動機が曖昧であると地元では警戒されてしまった。何か借りを返せずに逃げて来た筈なのに、本当のことを言わぬ奴というわけである。あけすけに「金か？女か？どっちなんだ？」と畳み掛ける始末。やむなく「いや、実は女のことで…」と言えばにっこり頷いてそれ以上は追求しない。なるほど、清算などめった